

縁植の二、三に就て

大 岩 金

櫻花の後の新緑も一雨毎にその縁をまして美しく見えます。

この縁を背景とした花壇、これも四月の大部分が秋植球根類やフレームで育てられたものであつたのかへて五月六月は秋播しておいた二年草や、株分、芽分けしておいた多年性草の露地物に代るのであります。

二月號に記しましたものゝ中、ブルムラボリアンサスはもう花は終りをつげましたけれどもまだ葉が青々々茂つて居りますので終つた花梗を根元から切りされば緑として觀賞する事が出来ます。その他のものはまだく奇麗に咲いて居ります。尙今から全盛に入るものはフランス菊、キンギョサウ、スキートアリッサム、ロベリア、マツバギク、ムシトリナデシコ、美女櫻、矢車草などの二年草、芍薬、牡丹などの多年性草であります。後者は花壇にあつても美

しく又切花にしても廣く愛好されて居ります。

挿木に就て

草花の挿木は温室を利用しますならば、ほごんご周年行ふ事が出来るのでありますが、露地にありましてはこの期まで待たなければなりません。

そしてこの期において挿木するものは草花類にありましては、ゼラニウム、サボテン、菊、ベゴニア、カーネーション、ダールリアなごその主なものであり木物にありましては常緑樹で挿木繁殖を主とするのは今月末から入梅期にかけて挿木すればよく活着するのでツツジ、椿、山茶花、青木、ハツ手なごその類であります。

花壇の縁取用として一番におすゝめしたい白丁花はも常緑さまでは行きませんがほごんご年中縁を保つて居り初夏の候には淡色の可愛らしい花さへも見る事が出来ます。是

もそろ／＼刈込を始めてその先を次々々々挿木して行きませう。

白丁花に就て

一、挿木の時期は今月から十月頃までは何時挿してもよく活着致します。

二、長さは約十糎。刈込の都合で二十糎も三十糎も伸びた枝からは二本も三本もされるわけでありまして、他の挿木の場合のやうに枝先に限らず全部使用出来るのであります。

三、一株として挿す量は數本をまこめて上下を揃へて切り落して挿します。この時枝の上下を混同せぬやうに注意致します。

四、挿床は九月迄はあまり日光の強く當らない所を選び十月に入つてからはなるべく日當りのよい場所を選びます。

床土は別に選びません。どんな所でもよく活着致します。

五、挿す深さは凡そ枝の長さの半分さしその部分の葉はこつておきます。そして白丁花は丈夫なものでありますか

ら一枚づゝ丁寧に鋏を用ひませんでも手でもぎ取つても差支へありません。

六、間株は挿床に挿して根附いた後相當の大きさになつて植出し致します。やうな場合には十糎位もあけておけば結構であります。極一時的で根附きさへすれば直ちに植出す場合さか或は直接花壇の縁に挿木する場合さには更につめて五糎内外にする事もあります。後者は外觀のわるくない程度の間隔を保てばよいのであります。そして大きくなり株の込み合つて來ました時に適宜植替を致します。

七、灌水、春夏にありましては大抵十日乃至二週間もしますれば細根が出ますからそれ迄はよく注意して乾燥しないやうに灌水してやります。發根後は特別乾燥した時の外は灌水しなくてもよいものであります。

秋挿の場合は最初に充分灌水しておきますればその後は根附くまで時に乾くにつれて灌水する程度でよいのであります。

八、植ゑ出し、春挿のものは梅雨期の頃にもなりますればもはや縁取りこして使用する事が出來ます。夏挿のもの

は秋に植ゑ出し、秋挿しましたものは來春を待つて植ゑ出した方が安全であります。

九、その他の注意としては炎暑の候に挿木しましたもの一層灌水に留意する事、秋挿するものはなるべく早くして降霜の期に入ります迄には充分發根して霜の爲に浮き上るやうな事のないやうにする事、もし未だ充分に發根して居ない爲に浮き上つたやうな場合には早く根元を壓してやる事、花壇に直接挿木する場合には特別注意して株の大きさ、高さなどを揃へて挿す事なごであります。

その外縁取用としての灌水には葉の小さいツツヂ、サツキの類を低く刈り込んだものもよろしく、ボケ、色々葉色の異つた柁木の類もすて難いものでありまして、是等も皆挿木によつて繁殖させるのでありますが前の白丁花のやうに刈込んだ後次へく、さいくらでも伸びて何回もの刈込みをするさいふ事はむづかしいので、多くは梅雨期に於て挿木して居ります。又挿しますにも前のやうに無雜作に挿しては活著し難く今少し丁寧な一本づゝみし、葉も缺を用ひて切り取るやうにするものであります。それ故先づ初歩さし

て今年には白丁花を縁取りさして用意したいと思ひます。

草木としてはリボン草が長期の觀賞に堪え且つ栽培も極めて容易であります。前月半ば頃から白み緑の縞になつた氣持ちのよい葉を茂らせて居ります。七月頃になりました一度刈り込みますれば又九月頃には新しい葉が出まして十一月頃まで眺める事が出来ます。繁殖は株分け、又は珠數玉様になつた地下莖を二、三個宛に離して植ゑておいてもよろしいので、時期も春秋いづれでもよろしく容易に大量に繁殖させる事が出来ます。

